

容先生のほほ笑み

関 口 勝

研究室にお邪魔すると、先生は一心に書物に向かわれているのが常であった。先生のご研究に向けられる情熱は激しいが、美しく軽やかであった。学生たちへの指導も余念がなく温かであり、先生の研究室には指導を望む学生が入れ替わり出入りしていた。「桃李成蹊」という成句があるが、先生のお人柄を表わすのに真にふさわしい言葉であると思う。

先生と親しく言葉を交わすことができるようになったのは、わたしが教養部の学生委員を務めていたときのことである。学生委員は当時、定期試験中は研究室に待機していなければならなかった。その日、わたしは研究室の扉を少し開けたままにしてCDを聴いていた。すると誰かが扉をノックされた。椅子から立ち上がり扉を開けると、そこには白い歯をのぞかせてほほ笑む容先生が立っていらっしやう。わたしはCDの音が先生の読書の邪魔をしてしまったのかなと思い、

「すみません。CDの音量を下げますね」

と申し上げると、先生は満面の笑みを浮かべながら、

「ちがう。廊下を歩いていたら、サミュエル・ホイの歌が聞こえてきたから。わたしこの歌、大好き！」

と先生独特の調子の日本語でおっしゃった。このとき聴いていたのは、確か「浪子心聲」という日本でも話題になった香港映画「半斤八兩」(Mr. Bool)の挿入歌だったと思う。先生のお話では、この歌を広東語のゼミで教えていらっしやる、とのことだった。わたしは高校時代にブルース・リ

一の話す広東語を聞き、その響きに魅せられ、ずっと広東語を学びたいと思っていたので、すかさず先生にお尋ねした。

「わたしも広東語のゼミに出席させていただいて、よろしいでしょうか」すると先生は二つ返事で、

「いいよ。いつでもいらっしゃい」

と快諾してくださった。何とか調整して、お伺いしようと思ったが、あいにくわたしの授業時間と重なってしまっていたため、ついに先生の門下に入る機会を逸した。

先生の広東語のゼミは、学生から圧倒的的支持を得ていた。わたしの中国語を履修した学生の多くが先生から広東語を学び、中には先生の影響で本学の派遣留学制度を利用し、香港の中文大学に留学して、広東語の達人な遣い手になって帰国した学生もいる。ところが近年、香港は普通話（中国語の標準語）を学ぶ環境としてふさわしくないという理由で、中国語学習者のための派遣校から中文大学が除外されてしまった。これは大変遺憾なことである。広東語教育に心血を注いでこられた先生のご心中は察するに余りある。

ついつい広東語教育のことばかり綴ってしまったが、先生のご専門は歴史学である。特に清朝末期に活躍した容闳という人物を中心に研鑽を積み、数多くの著書、論文を公表されている。わたしが台湾で開催されたシンポジウムに出席した時のことであるが、台湾をはじめ、各国の著名な研究者と名刺交換をするたびに、

「亜細亜大学の方ですか。貴校には容應莢先生がいらっしゃいますよね」と尋ねられた。これは先生のご研究成果が日本のみならず、中国、台湾などの学界でも高い評価を得ている証しである。

先生は歴史学の泰斗である。にもかかわらず、いつも謙遜で笑顔を絶やさされることなく、わたしが教育、研究で行き詰まり、先生に愚痴をこぼすと、きまって、

「わたしもおんなじ。みんなおんなじ。気にしなくていいよ」
とほほ笑みを浮かべ励ましてくださった。

先生には旧1号館時代から研究室が近かったこともあり、親しく接していただく幸運に恵まれた。先生のほほ笑みはいつもわたしの背中を軽く押してくださり、勇気づけてくださった。そんな先生がこのたびご定年を迎えられ、ご退職なさることに、深い寂寞の念を禁じ得ない。

今後も健康にご留意いただき、楽しい日々を過ごされることを祈念申し上げます。

最後に先生の母語である漢語で一言。

「由衷地感激容老師，後會有期！」